

ISSN 2186 – 3989

源氏物語にみられる助動詞「べかめり」の用法（二）
—地の文における用例を中心に—

坂田 一浩

Usage of Classical Auxiliary Verbs “bekammeri” in the Tale of Genji. Part II
—Focusing on the examples in Narrative Sentences—

Kazuhiro Sakata

北 陸 大 学 紀 要
第58号(2025年3月)抜刷

源氏物語にみられる助動詞「べかめり」の用法 (二)

—一地の文における用例を中心に—

坂田 一浩*

Usage of Classical Auxiliary Verbs “bekammeri” in the Tale of Genji. Part II

—Focusing on the examples in Narrative Sentences—

Kazuhiro Sakata*

Received December 2, 2024

Accepted December 18, 2024

Abstract

This paper aims to analyze the usage of auxiliary verb “bekammeri”, focusing on the narrative sentences of the Tale of Genji.

In narrative sentences, most of examples “bekammeri” describe the events that the narrator is observing, whereas in conversational sentences, they normally describe events that are generalized and non-speaker-concerning (Hitogoto),

In this novel, it is clear that in order to describe the behavior, emotion, and thought of characters, the narrator expresses the psychological distance between the characters and herself by “bekammeri”. Therefore, concerning the way of describing characters, we propose the framework consisting of three elements (subject, object, and bystander, namely Shu-Kyaku-Bou), based on the “Subject-Object (Shu-Kyaku)” theory proposed by Hiromichi Hagiwara. We find that the text-constructing function of “bekammeri” is strongly influenced by the framework of Shu-Kyaku-Bou.

Furthermore, we attempt to analyze the co-occurrence of “bekammeri” and “beshi” or “meri”. The results show the complementary relationships between both auxiliary verbs.

* 北陸大学経済経営学部 (学外講師) Faculty of Economics and Management, Hokuriku University (Faculty Extramural)

はじめに

本稿では源氏物語にみられる助動詞「べかめり」の用法につき検討する。今回は前稿で会話文における用例を分析したのを承ける形で、地の文（以下古注釈にみられる伝統的な術語に従い、「地」と称する）における用例を取り上げる。筆者の根本にある問題意識は、なぜそこであえて（例えば意味上近似する「べし」や「めり」ではなく）「べかめり」が用いられているのか、という点であり、本稿はまた、その必然性を明らかにする作業を通して源氏物語におけるテキスト構成機能、ひいては当該助動詞の語性の解明を志向するものである。

一、源氏物語の地における「べかめり」の機能—語り手の視点、および草子地との関わりを中心に—

本節では源氏物語の地において「べかめり」がどのような意味を担い、テキスト構成に際していかに機能しているかという点について検討を試みる。それにあたって注意しなければならないのは、前稿で検討した詞における叙述のあり方との違いである。ここでは「べかめり」を用いて作中人物である話者の視点・立場から事態の述べ立てが行われていたのであった。これに対し地では、とりわけ源氏物語特有のありようとして、物語作者とは別に「語り手」が想定され、叙述はその語り手の視点からなされるという点が大きな相違として挙げられる。そうしてさらに問題を複雑にするのは、この語り手の視点が、物語の場面を自由に移動し、場合によっては登場人物の視点にあたかも憑依するような形で同化する事例が多くみられることである¹。この点で本作品における語り手の視点は複眼的かつ可変的であり、地における「べかめり」の考察に際しても常にこのことに留意する必要がある。

ところで、源氏物語の地には古来より草子地といわれる、語り手の事態把握のありようや出来事・人物に対する批評が顔をのぞかせている部分の存在が古注釈で指摘されている（この草子地といわれるものの内実も、研究者によってさまざまな理解があるため一概にこれと定義するのは難しいが、今は中野幸一（1971）の「物語の地の文において、感想・注記・批評・説明など、作者と思われるものが物語の表面に出て、直接発現している部分、あるいは読者を意識した作者の姿勢が認められる部分」とする定義にしたがっておく）。今それらの子細に検討すると、「べかめり」を含む叙述に対して草子地と注記している例が散見されるのである。

ましてさりぬべきついでの御ことのはもなつかしき御けしきをみたてまつる人のすこしものの心おもひしるは、いかがはおろかにおもひきこえん。あけくれうちとけてしもおはせぬを心もとなきことにおもふべかめり。 夕顔 111 細流抄「草子地也。」

殿、御かがみなどみたまひて、しのびて、「中将のあさけのすがたはきよげなりな。ただいまはきびはなるべきほどを、かたくなしからずみゆるも、心のやみにや、とて、わが御かははふりがたくよしと見給ふべかめり。 野分 45 明星抄「草子地の判也」

げにそこはかとなくかきみだり給へるしもぞいと見まほしきそばめなるを、いとこよなき御心ざしのほどと人々みたてまつる。おのおの故郷に心ぼそげなることづてすべかめり。 明石 62 岷江入楚「筆者のおしはかりてかくなり」

実際、用例について調査してみると、地の文の「べかめり」70 例のうち約 4 分の 1、23%にあたる 16 例について、いずれかの古注釈が草子地と判定している²。これは地にみられる「べかめり」述べ立て事態が、語り手の視点や事態把握のあり方を強く反映しているということにほかならず、このことはまた、前稿で詞の「べかめり」を考察した際に用例の発話者が誰かという点を重視したのと同様、地においては語り手の立場を考慮に入れる必要があることを意味する。

二、源氏物語の地における「べかめり」、その用法上の特徴―詞における

用法との比較を通して―

源氏物語の地における「べかめり」の用法上の特徴を明らかにするにあたり、まずは前稿で考察した、詞における用法と比較するところからはじめたい。前稿では詞における用法を、話者の視点や事態のありよう（既実現か未実現か等）などを基準に大きく五つに分類した。今、地の用例を同様の枠組みによってひとまず分類してみると、詞において多くみられた、「世の常のこと」すなわち一般的事例を述べ立てる用法（Ⅰの類型）が殆どみられないという点が指摘できる³。また詞においては 83 例中 14 例みられた、未実現事態の述べ立て（類型Ⅳ）の例も地においては 70 例中 1 例と僅少であり（「あながちになどかゝづらひまどはゞ、たふるゝ方にゆるし給ひもしつべかめれど、つらしとおもひしをり／＼、いかで人にもことわらせたてまつらむとおもひおきしわすれがたくて、」蛸 443）、さらに類型Ⅲの、事態に対する表現主体の主張見解を表立って述べ立てる例も 2 例と少ない。その一方で地の「べかめり」において大半を占めているのが類型Ⅱ、すなわち

Ⅱ）既実現かつ真偽の確認がとれない、あるいは取りようのない身近な「ひとごと」事態（他者の心中や世評など）を、距離を確保しつつ推定のタイプであり、実に 70 例中 67 例がこれに属する。ちなみに詞での例は前稿で示した通り、

①「その人とはさらにえ思ひえ侍らず。人にいみじくかくれしのぶるけしきになむみえ侍るを、つれづれなるままに南のはじとみあるなかやにわたりきつつ、車のおとすればわかきものどものぞきなどすべかめるに、このしうとおぼしきもはひわたる時ははべかめる。」 夕顔 111（惟光→源氏、五条の家について）

②「すい給へるやうに人はきこえなすべかめれど、心のそこあやしくふかうおはする宮なり。」 椎本 368（薫→大君、匂宮について）

のようなものをその典型とする。今このⅡに相当すると思われる地の例を挙げてみる。

③ かたほなるをだに、めのとやうの思ふべき人は、あさましうまほにみなすものを、ましていとおもだたしうなづさひつかうまつりけん身もいたはしうかたじけなくおぼゆべかめれば、すすろに涙がちなり。 夕顔 103

④ げにいと心ことによしありて、おなじ木草をもうゑなし給へり。月もなきころなれば、やり水にかざり火ともし、灯籠などもまゐりたり。南面いときよげにしつ

らひ給へり。そらだきものいと心にくくかをり出で、名香の香などにほひみちたるに、君の御おひかぜいとことなれば、うちの人々も心づかひすべかめり。 若紫 161

⑤ あはれ、このころぞかし、野の宮のあはれなりしこと、とおぼしいでて、あやしう、やうの物と、神うらめしうおぼさるゝ御くせのみぐるしきぞかし。わりなうおぼさば、さもありぬべかりしとしごろは、のどかにすぐい給ひて、いまはくやしうおぼさるべかめるも、あやしき御心なりや。 賢木 369

ひとまずこのように、詞において試みた分類の枠組みを地の用例にあてはめてみたが、仔細にみると詞の類型Ⅱの諸例と、地におけるⅡ相当例とは、全体として以下の3つの点において相違をみせている。

まず詞と地において、Ⅱの規定に示した「ひとごと」の持つ意味が大きく異なる、という点である。そもそも地における表現主体である語り手にとって、叙述対象である登場人物の挙動は基本的に「ひとごと」であるには違いない。ただ詞における「ひとごと」が話し手にとっては自身の「わがこと」との対立によって意味を持つものであったのに対し、地におけるそれは「わがこと」との対立をもたない。いわゆる「自分語り」、すなわち我を語ることなく、叙述において我の痕跡を努めて消し去ろうとする語り手にとって、「わがこと」という軸を基準に他のひとごと事象を定位する必要がないからである⁴。実際、詞において4例みられたような、「べかめり」によってわがこと事態を直接述べ立てた例（類型Ⅴ）は、地においては確認されない。加えて地では、さきも述べたように描写に際しては全知の視点から、あらゆる人物、事象を俯瞰的に捉えた上で、それぞれに対して比較的公平な視線が注がれる。語り手はあらゆる事態を自他、親疎の別なく平等に捉え、登場人物の立場や利害に関しても局外の位置にいる。よってそこでは「わがこと⇔ひとごと」の対立が解消されるのである。

第二に、詞の類型Ⅱにおいて「べかめり」が述べ立てる事態は、発話時点において話し手の眼前にない、非めのまへ事態がその殆どを占めていた。これに対して地では、

⑥ 御かはらけまゐりて、ゑひのかなしび涙そそく春のさかづきのうちともろごゑに誦し給ふ。御ともの人も涙をながす。おのがじしはつかなるわかれをしむべかめり。 須磨 433

のように、語り手の眼前で今まさに生起している事態を「べかめり」が述べ立てる例が多くを占めている。

この点に関連して第三に、詞におけるⅡの類型は、（述べ立て対象が非めのまへであることの当然の帰結として）話し手にとって真偽がさだかでない事態を推定する、という例が多くを占めていた。一方地において、詞のⅡに相当する諸例は推定というよりも、語り手の眼前、すなわち物語の場面で生起している事態を描写する例が多くみられる。上に挙げた④の例がそうであるが、他にもいくつか挙げておく。

⑦ 御なほしなど着給ひて、南の高欄にしばしうちながめ給ふ。西面の格子そそき上げて、人々のぞくべかめり。すのこの中のほどに立てたる小障子の上よりほのかに見え給へる御ありさまを、身にしむばかり思へるすき心どもあめり。 箒木 70

⑧ 夢みたまひて、いとよくあはするものめしてあはせ給ひけるに、「もしとしごろ御心にしられ給はぬ御こを、人のものになして、きこしめしいづることや、ときこえたりければ、「女ごの人のこになることはをさをさなしかし、いかなることにかあらむ、」など、このごろぞおぼしのたまふべかめる。 蛸 444

⑨ うちのおほいどの頭の中将などに葦でうたゑを思ひ思ひにかけとのたまへば、みな心々にいどむべかめり。 梅枝 162

⑩ 仏の御へだてに、さうじばかりをへだててぞおはすべかめる。 橋姫 309

⑪ 君、すこしかたゑみて、さることとおぼすべかめり。いづかたにつけても人わくるはしたなかりける御ものがたりかな、とてうちわらひおはさうず。 帚木 55

⑫ くろき御車のうちにてふちの御たもとにやつれ給へればことにみえ給はねどほのかなる御ありさまを世になく思ひきこゆべかめり。 賢木 359

なおこれら語り手の目の前で生起している事態の描写とみられる例にも、⑦から⑩のように人物の挙動を描写するものと、⑪、⑫のように心理描写にあずかるものとの二種類があることに注目しておきたい。換言すれば、源氏物語の地における「べかめり」の描写の対象についてについては、1)覚知可能な言動、2)直接覚知しがたい人物の心理を述べ立てる例の二種に大別されるということである。

このように地の「べかめり」では語り手の眼前にある、具体的事象を描写する例が大半を占め、詞のそれにおいて一定数みられたような、表現主体が自身の見解や主張を述べ立てる例は僅かである。ちなみに詞に多くみられたⅠの一般的事例を述べる用法においても、

⑬「かぎりなき人ときこゆれど、いまの世のやうとては、みなほがらかにあるべかしくて、世の中を御心とすぎし給ひつべきもおはしますべかめるを、姫宮は、あさましくおぼつかなく心もとなくのみみえさせ給ふに、さぶらふ人々は、つかうかつるかぎりこそ侍らめ。 若菜上 217

⑭「なべてのつかうまつり人こそとあるもかかるもおのづからたちまじらひて人のみをもめをかならずしもとどめぬものなれば心やすかべかめれ、それだにその人のむすめかの人のことしらるきはになればおやはらからのおもてぶせなるたぐひおほかめり、まして、とのたまひさしつる御けしきの 常夏 19

⑮「なにごともし心やすきほどの人こそみだりがはしうともかくもはべかめれ、こなたをもそなたをもさまざま人のきこえなやまさむ、ただならむよりはあぢきなきを、なだらかにやうやう人めをもならすなむよきことにははべるべきと申し給へば、 行幸 80

上の諸例が典型的に示すように、一般的事例、世の常のあり方を「べかめり」による述べ立てによって引き合いに出し、目の前の個別事象と対比させることで話者自身の見方や主張に説得力をもたせる（例えば⑬の例では姫宮の頼りないさまを、世間一般のさまと対比させることで強調している）という用法が多くみられたが、地ではそのような説得的な用法は僅少である。

以上の検討から見えてくるのは、地の「べかめり」は総じていえば場面描写、さらにいえば実況型であり、「今ここ」で起こっている事態を描写することが中心であるという点である。それはいきおい詞において多く見られたような、場面から離れて一般論を述べ立てる、あるいは未実現の事態を述べる、さらに当為判断を示すという例が極めて少ないということを意味する。すなわち設想や主張ではなく描写、これが地の「べかめり」にみられる特徴的用法といえる。ちなみに、描写にあえて推量辞「べかめり」が用いられるのは語り手が述べ立て事態との距離を確保するためで、小西（1971）は推量助動詞を用いた語り手によるこのような描写を、作中人物と語り手・享受者との間に「離れ」を形成するためのものとしている。

以上の考察から詞の用例と比較して地は、その用法が或る特定の類型への偏りを見せていることが明らかとなった。このようなふるまいを見せる要因の一つとして、物語叙述における語り手の立場と視点、さらには述べ立ての態度が大きく関わっていることは容易に想像できる。地の「べかめり」が描写に傾くというのも、表現主体である語り手が場面描写の機能を担う、ということの反映であろう。とりわけここで注目したいのは、地の用例においては詞の用例にみられた（話し手の立場を反映した）「わがこと⇔ひとごと」の対立が解消されているという点である。ただ、そうであるにしてもなお、叙述にあたっの語り手の何らかの「立場」というものは存在するはずである。またそれが、（詞における「わがこと⇔ひとごと」と同じく）「べかめり」の述べ立てにも反映されているのではないだろうか。さらに踏み込んで考えるならば、地の用例においても「わがこと⇔ひとごと」の別に相当する、物語叙述における語り手の視界構造を反映した枠組みが存在するのではないか、という疑問が生じてくる。次節ではこの、地における「べかめり」とそれを使用する語り手の視点との関わりについて検討することとしたい。

三、源氏物語の地における「べかめり」叙述の視点—萩原広道の「主客」

概念を掘り所に一

前節を踏まえて本節では、特に本作品における語り手の視点や事態把握のあり方が地の「べかめり」の使用にどのように反映されているかという点に焦点を当てて考察を試みる。

ここでまず、次の二つの例をみてみたい。

1 いとしのびてかよはし給ふことはなほおなじさまなるべし。もののきこえもあらばいかならむとおぼしなごられいの御くせなれば今しも御心ざしまさるべかめり。 賢木 355

2 御几帳ばかりをへだてて、みづからきこえ給ふ。「前裁どもこそこのりなく紐とき侍りにけれ。（以下略）」とて、柱によりみ給へる夕映え、いとめでたし。

（中略）宮もかくればとにや、すこしなき給ふけはひいとらうたげにて、うちみじろぎ給ふほどもあさましくやはらかになまめきておはすべかめり。みたて

まつらぬこそくちをしけれと、むねのうちつぶるゝぞうたてあるや。 薄雲 240

前節でみてきたように、源氏物語の地の「べかめり」では登場人物の心理描写に関わる例が多くみられる。ここに挙げたものもその一例であるが、1 では語り手が自身の視点から登場人物の心理に立ち入って描写、語り手の視点は登場人物に終始向けられている。これに対して 2 は、光源氏が斎宮女御と几帳越しに対面する場面であるが、「あさましくやはらかになまめきておはす」という、「べかめり」が述べ立てる女御のさまは、源氏の視点を通してのものである⁵。すなわち、ある人物の心理を描写する際の視点が、もう一方の登場人物の側に立ったものなのであり、他にもこのような例は多くみられる。では、地において心理描写に「べかめり」が用いられた場合のこのような違いをどう捉えればよいのか。この問題を考えるには「べかめり」を用いる際にどのような視点から対象となる人物を叙述しているか、すなわち語り手の視点と「べかめり」による述べ立てとのかかわりについて考察する必要がある。

それには語り手とその叙述対象である人物との関わりはもちろんのこと、人物相互の関係、さらには場面と登場人物との関係性についてもみていかなければならない。そもそも地における語りでは、ある場面に人物が一人であれば当然、その人物を語り手自身の視点で叙述することになるが、その一方で、当該場面に関わる人物が二人以上の場合、どうであろうか（ここであえて「関わる」としたのは、直接その場に居合わせる場合だけでなく、そこにいる人物がその場にいない人物を想起したり、あるいは会話において言及したりする場合も含めてのことである）。本作品では二人の人物が対話する場合においてメインとなる人物とそれに相対する人物（いわゆるサブ）とが設定、すなわち人物相互に場面における軽重の落差を設けた上で、物語の叙述に際しては前者の視点を借りて後者が描写される、ということが往々にしてみられるのである。これが今挙げた2のケースであるが、本作品のこのような対話場面での、メインとサブともいべき人物相互の関係性に夙に着目したのが萩原広道である。その著『源氏物語評釈』（以下広道評釈と略称する）ではこれを「主客」と名付けて次のように述べる。

主客 人と人と相対ひて事ある時、其むねとあるかたを主といひ、その主たる人のためにして対へる方を客といふ。これによりて、其所の文に内外の差あり。又其巻其段につきても主客の法あり。准へて知るべし。（惣論頭書注釈凡例）

ここでの主客とは、最初の一文を読む限りでは主に対面の場面において、主たる人物と、それに応対する側の人物とを意味するようであるが、後続の文を読むと「人と人と相対ひて事ある時」と「其巻其段につきて」の両様の「主客の法あり」と認識しているものと理解される。このように広道の主客概念に関してはある種の不明瞭さが感じられるのであるが、広道は主客の概念を広狭二つに使い分けているふしがある。これを端的に言えば、一つは或る場面、特に対話における主客であり、今一つは巻全体、あるいは連鎖する巻全体を通してメインとサブの関係となる、物語叙述における人物相互の関係性としての主客である、ということになる。後述するように「べかめり」はこの両ケースに関わりつつ機能していると思われるのであり、この点でも本助動詞の地における機能の分析に当たって、この主客概念の援用は有用であろうと思われる。また、これらいずれのケースにおいても主客両者の間に「内外の差」、すなわち段階的相違を認める、という指摘も本作品のテキスト解析においては重要であろう。

さてここで広道評釈において、主客の概念が実際の本文の注の中でどのように援用されているかをみると、

1) 一のみこは右大臣の女御の御はらにて、よせ重く、うたがひなきまうけの君と世にもてかしづききこゆれど、この御にほひにはならび給ふべくもあらざりければ、・・・（評）主客の法を設けて、云々

2) 弘徽殿の女御、またこの宮とも御なかそばそばしきゆゑ、うちそへてもとよりのにくさもたちいでて、ものしとおぼしたり。（評）これかのよしあしの主客の脈なるがますます甚しくなりゆくさま味はふべし。

（以上、桐壺巻）

3) 紙燭めして、ありつる扇御覧ずれば、もてならしたるうつり香いとしみふかうなつかしくて、をかしうすさみ書きたり。（評）さきに扇はご覧すべきを惟光出来り案内して入るにさわがれて止給ひし故に今取出て見給ふ也、さて初は尼君を訪給ふかた主なりしを、こゝに至りて夕顔のかた主となり尼君の方客となりたる法也、いとめでたし。

（以上、夕顔巻）

以上のように、主客がそれぞれ 1)では光源氏と一のみこ（後の朱雀帝）、2)は藤壺（この宮）と弘徽殿女御、3)は尼君と夕顔（後に入れ替わるとする）に比定されていることがわかる。このように必ずしも一場面において相対する人物を問題とするわけではなく、

夕顔の例のようにストーリー展開における主客の交替を指摘するなど、広道のいう主客は巻全体にも及び得る広い概念でもあることが分かる⁶。

ではこの「主客」概念を地の「べかめり」の分析にどう援用すべきか、次にこの点につき考えてみたい。

四、「主客」概念に基づく地の「べかめり」の用法解析

ここでは主客概念の援用によって地の「べかめり」の用法について何がみえてくるのか、この点を具体例の解析を通して考察してみる。特に問題となるのは語り手の叙述視点と「べかめり」による述べ立てとの関わりである。

まず、ある場面において語り手の叙述の中心となっている人物を「主」と規定する。当該場面の叙述において登場人物が一人であれば当然その人物が「主」となる。また、その場面空間上に複数の人物が存在、あるいは物語叙述構成上観念的に複数の人物相互の対比がなされている場合は、その中で叙述の焦点、あるいは場面構成の中心となっている一人の人物を「主」とする。では、「べかめり」がこの「主」の挙動を述べ立てる場合、どのような特徴がみられるであろうか。以下、具体例をもとに考察してゆく。用例末尾の括弧内に示すのは、主に該当する人物である。

⑯おぼしめしやりつつ、灯火をかかげつくして起きおはします。右近の司の宿直申しの声きこゆるは、丑になりぬるなるべし。人目をおぼして夜のおとどに入らせたまひても、まどろませ給ふことかたし。あしたにおきさせ給ふとても、あくるもしらで、とおぼしいづるにも、なほあさまつりごとはおこたらせ給ひぬべかめり。物などもきこしめさず、朝がれひのけしきばかりふれさせ給ひて、大床子のおものなどはいとはるかにおぼしめしたれば、陪膳にさぶらふかぎりは心ぐるしき御けしきをみたてまつり嘆く。 桐壺 17（桐壺帝）

⑰（左馬頭ノ詞）「なにがしがいやしきいさめにて、すきたわめらむ女に心おかせ給へ。あやまちして、見む人のかたくななる名をもたてつべきものなり」と戒む。中将、例のうなづく。君、すこしかたゑみて、さることとおぼすべかめり。いづかたにつけても人わるくはしたなかりける御ものがたりかな、とてうちわらひおはさうず。 簞木 53（光源氏）

⑱さるべき節会どもにも、この御時より、と末の人の言ひ伝ふべき例をそへむとおぼし、私さまのかかるはかなき御あそびもめづらしき筋にせさせ給ひて、いみじき盛りの御世なり。おとどぞなほつねなきものに世をおぼして、いますこしおとなびおはしますとみたてまつりて、なほ世をそむきなんとふかくおもほすべかめる。 絵合 185（同上）

⑲夢みたまひて、いとよくあはするものめしてあはせ給ひけるに、「もしとしごろ御心にしられ給はぬ御こを、人のものになして、きこしめしいづることや、ときこえたりければ、「女ごの人のこになることはをさをさなしかし、いかなることにかあらむ、」など、このごろぞおぼしのたまふべかめる。 蜩 445（内大臣）

⑳その日は、後の宮なやましげにおはしますとて、たれもたれもまゐり給へれど、御かぜにおはしましければ、ことなる事もおはしまさずとて、おとどは昼まかで給ひにけり。中納言の君さそひきこえ給ひて、一つ御車にてぞいで給ひにける。こよひの儀式、いかならむきよらをつくさむ、とおぼすべかめれど、かぎりあらむかし。

この君も、心はづかしけれど、親しきかたのおぼえは、わが方ざまに、またさるべき人もおはせず、もののはえにせんに、心ことにおはするひとなればなめりかし。

宿木 57 (夕霧)

⑬では「べかめり」を含む文、さらにその前後の文とも一貫して、桐壺更衣亡き後の桐壺帝の悲嘆のさまを描写しており、当該場面での「主」であること明瞭である。「べかめり」はここでは、「主」の挙動につき語り手の視点からの推測がなされている。また⑭は雨夜の品定めの一場面であるが、ここに集う男性貴族の中でも光源氏を中心とした叙述がなされ、ここの「べかめり」は当の源氏の心中を述べ立てている。ちなみに源氏がここでの叙述の中心、すなわち主であることは、他の人物が談話の主体となる場面でも描写の目が折々源氏に注がれていることから裏付けられる。⑮では主たる光源氏の表だった華やかな生活の裏面を暴露する形で、「べかめり」を含む部分は心密かに抱いている出家への志向を剔抉している。一方⑯は蜚蜚の末尾で、内大臣の、娘たちへの思いが縷々と綴られている箇所である。ちなみに湖月抄には「草子地也」とある。巻末の文、すなわち語りの閉じめということで、語り手の述べ立ての姿勢が特に強く出やすい箇所である。

以上の例からも分かるように主についての「べかめり」叙述は、表面上窺い知ることのできないその内面心理の述べ立てに用いられることが多く、それはまた、語り手の視点を通しての描写であること、⑰では古註の岷江入楚が「物語の作者のいふ詞也」、また⑱⑲では湖月抄が「(草子)地也」と指摘していることから明瞭である。

以上挙げた「主」に対して、以下の場合を「客」と規定する。すなわち、1)ある場面において空間的に複数の人物が存在する場合の、「主」に相対する人物、2)物語叙述構成上観念的に複数の人物相互の対比がなされている場合の、「主」以外の人物、3)「主」の発言や心中思惟において、その観察・思念の対象となる人物、以上を客と名付ける(今簡単のために、これらをそれぞれ「応対相手」「叙述対置」「思念対象」と名付ける)。例を挙げると次のようである。

1)主の応対相手の挙動に「べかめり」叙述

⑱音もいとなういづる琴どもを、いとなつかしうひきならしたるも、御心とまりて、「これは、女のなつかしきさまにてしどけなうひきたるこそをかしけれ」とおほかたにのたまふを、入道はあいなくうちゑみて、「あそばすよりなつかしきさまなるは、いづこのか侍らん。(中略)いかでこれもしのびてきこしめさせてしかなときこゆるまに、うちわななきて涙おとすべかめり。 明石 66

⑲御几帳ばかりをへだてて、みづからきこえ給ふ。「前栽どもこそこのこりなく紐とき侍りにけれ。(中略)」とて、柱によりゐ給へる夕映え、いとめでたし。(中略)宮もかくればとにや、すこしなき給ふけはひいとらうたげにて、うちみじろぎ給ふほどもあさましくやはらかになまめきておはすべかめる。みたてまつらぬこそくちをしけれと、むねのうちつづるゝぞうたてあるや。 薄雲 240

⑳宮、(中略)などのたまひて、かたみに御消息かよひ、(薫ハ)みづからもまうで給ふ。げに聞きしよりもあはれに、すまひ給へるさまよりはじめて、いとかりなる草の庵に、思ひなしことそぎたり。(中略)仏の御へだてに、さうじばかりをへだててぞおはすべかめる。 橋姫 309

㉑は一場の主たる光源氏に明石入道が応対している場面で、入道の「涙おとす」は語り手の視点であると同時に源氏の視点からの叙述とみることができる。また㉒は主たる光

源氏が対面した相手である斎宮女御のさまを源氏の視点より描写しており、物ごしの対面ゆえ「べかめり」が用いられているとみることができる（ちなみに岷江入楚は引用末尾の一文に対し、「草子の地に評してかけるなり」と註する）。㉓は薫の視点から宇治の姫君の様子を描写した箇所、場面の「へだて」ゆえに前文の「たり」に対して「べかめる」が用いられているものと解釈できる。

2) 叙述対置の「べかめり」

㉔いとしのびてかよはし給ふことはなほおなじさまなるべし。もののきこえもあらばいかならむとおぼしなごられいの御くせなれば今しも御心ざしまさるべかめり。院のおはしましつる世こそはばかり給ひつれ、後の御心いちはやくて、かたがたおぼしつめたる事どものむくいせんとおぼすべかめり。ことにふれてはしたなきことのみいでくれば、かかるべきこととはおぼししかど、見知り給はぬ世のうさにたちまふべくもおぼされず。 賢木 355

㉕そのころのことには、この絵のさだめをしたまふ。かの浦々の巻は、中宮にさぶらはせ給へ、ときこえさせ給ひければ、これがはじめ、残りの巻々ゆかしがらせ給へど、いまつぎつぎにときこえさせ給ふ。うへにも御心ゆかせ給ひておぼしめしたるを、うれしくみたてまつり給ふ。はかなきことにつけても、かうもてなしきこえ給へば、権中納言は、なほおぼえおさるべきにやと、心やましうおぼさるべかめり。 絵合 184

㉖心にくくもてかしづき給ふ姫君たちを、さるは、心ざしことに、いかでと思ひきこえ給ふべかめれど、宮ぞ、いかなるにかあらむ、御心もとめ給はざりける。 竹河 290

㉔では弘徽殿女御の心中に「べかめり」が用いられている。後続文で源氏の心中が対置され、客の事態として「べかめり」が用いられているものとみられる。㉕では主たる源氏の挙動に対置させるために、権中納言の心中に「べかめり」が、また㉖では客たる右大臣の心が「べかめり」によって叙述されているが、対する主（＝匂宮）の心が後続文において対置されている。ここで宮が「ぞ」で取り立てられていることから、後者が「主」であることがわかる。以上のように叙述対置では、主に語り手の視点が注がれるため、それに対する客は影の事態となり、そこに遠近法が構成され、語り手からは遠い事態として推し量りの「べかめり」が用いられている。次節において触れるように、ここで主の挙動の叙述には「たり」「けり」などの（推量ではない）確定系の助動詞が用いられていることに注意する必要がある。

3) 観察・思念対象述べ立ての「べかめり」

㉗いとほしうてものもえきこえず、いとふかう憎み給ふべかめれば、身もうくおもひはてぬ。 空蟬 93

㉘殿におはして、なきねにふしくらし給ひつ。御ふみなどもれいの御覧じいれぬよしのみあれば、つねのことながらも、つらういみじうおぼしほれて、うちへもまゐらで二三日こもりおはすれば、又いかなるにかと御心うごかせ給ふべかめるも、おそろしうのみおぼえたまふ。 若紫 177

㉙まちとり給へる、はたなまけやけしとおぼすべかめる心のうちはかれ給ひて、（中略）と御けしきとり給ふもをかしくみゆ。 初音 384

②⑦では空蟬の心中を「(源氏ヲ)いとふかう憎み給ふ」と推定するのであるが、これは源氏の立場・視点からの、心理的な距離を感じさせて測りがたいとする心持ちで、それがここで「べかめり」が用いられる一つの要因となっている。また②⑧は桐壺帝についての源氏の視点からの措辞である。藤壺との情事後、桐壺帝の心中を推し量る源氏であり、明らかに源氏の視点からの叙述がなされている。一方②⑨では主たる源氏が、客たる紫上の心中を推し量るという、主の視点に立つことで「べかめり」が用いられているとみることができる。

③⑩今はさりととも心やすきをとおぼして、宮はねんごろにきこえ給ひけり。はかなき御かへりも、きこえにくくつつましきかたに、女がたはおぼいたり。世にいといたうすき給へる御名のひろごりて、このましくえんにおぼさるべかめるも、かういとうづもれたる葎のしたよりさしいでたらむ手つきも、いかにうひうひしく、ふるめきたらむ、など思ひくし給へり。 椎本 364 「かう」との対比で「べかめり」はそなた事態

③⑩では「女がた」、すなわち大君と中君の挙動には「おぼいたり」「思ひくし給へり」と「たり」「り」が用いられ、他方、宮すなわち匂宮に対しては「きこえ給ひけり」と「けり」叙述である。このように「たり～けり」により場面上的の遠近が構成され⁷、「たり」が述べ立てる「女がた」がここでは主、他方の宮は客となる。そうしてここに現れた「べかめり」は、主たる女方の思念の対象として、宮の挙動を述べ立てている。これらの例が示すように客の挙動を「べかめり」が述べ立てる場合、その視点は語り手のそれであると同時に客を意識する主のそれでもある場合が多い。その、今一つ「客」の心中を主が測り切れないという距離感覚が「べかめり」によって表現されているものと考えられる⁸。

以上みてきた 1)～3)は一見別次元のものが混在しているように見えるが、いずれの場合も語り手の視座は「主」に置かれ、そこを起点として主との対比を踏まえた上での描写がなされている。そうして「べかめり」は、その述べ立て対象である「客」を「主」に比して相対的に遠いものとして描写し、これが「べかめり」が用いられる一つの理由となっている。また、1) 3)では語り手のみならず主の視点が介在している例も多くみられるのが特徴的であり、主から見た「遠さ」「いぶかしさ」を表明するものともなっている。この点からもさきにみた主における叙述のありようとの違いが窺える⁹。

以上、「べかめり」による叙述の視点のありようを見定めるために、広道評釈における概念を援用しつつ主客の別を定めてみたが、本作品にみられる地の「べかめり」述べ立ての登場人物がはたして常に、主客のいずれかに仕分けられるかどうか。例えば次のような例はどうであろうか。

げにそこはかとなくかきみだり給へるしもぞいと見まほしきそばめなるを、いとこよなき御心ざしのほどと人々みたてまつる。おのおの故郷に心ぼそげなることづてすべかめり。 あかし 62

これは須磨流謫の際に源氏が紫上を思いやるさまを描写したのに続いて、源氏の供の者の挙動を「べかめり」が述べ立てている場面であるが、ここでの供の者は当該場面においては主にあらず、さりとて主と直接の応答もなく、また主の思念の対象にもならない（すなわち主の意識の射程の外にある）ところから、客にもあらざる人物である（ちなみに古註の岷江入楚はこの個所に「筆者のおしはかりてかくなり」と注する）。源氏物語ではこのような従者や侍女、その他或る場面において点景として登場する人物なども

多く「べかめり」で述べ立てられている。このようなケースをどう位置付けるべきか。本稿ではこれらの例を「傍」と名付けることとしたい。これに該当する若干の例を以下に挙げる（なお「べかめり」述べ立て用言の動作主は、本文に明示のものは波線で、そうでないものは用例末尾の括弧に示した）。

㉑あまへていかにきこえむなどいひしろふべかめれど、めざましとおもひて隨身はまゐりぬ。 夕顔 105（五条の家の侍女たち）

㉒御かはらけまゐりて、ゑひのかなしび涙そそく春のさかづきのうちともろごゑに誦し給ふ。御ともの人も涙をながす。おのがじしはつかなるわかれをしむべかめり。 須磨 433

㉓げにそこはかたなくかきみだり給へるしもぞいと見まほしきそばめなるを、いとこよなき御心ざしのほどと人々みたてまつる。おのおの故郷に心ぼそげなることづてすべかめり。 明石 62（源氏の従者）

㉔山のこだち中島のわたり色まさる苔のけしきなどわかき人々のはつかに心もとなくおもふべかめるに、からめいたる船つくらせ給ひける、いそぎ装束かせ給ひて、おろしはじめさせ給ふ日は、雅楽寮の人めして、舟の楽せらる。 胡蝶 400

㉕さまざまに、われ人にまさらむと、（香ヲ焚キナド）つくろひ用意すべかめるを、かくかたはなるまで、うちしのびたちよらむ物のくまも、しるきはのめきのかくれあるまじきにうるさがりて、をさをさ（香ヲ）とりもつけ給はねど、あまたの御唐櫃にうづもれたる香のかどもも、こに君のはいふよしもなき匂ひをくはへ、（後略）匂宮 219（林逸抄に「たきしめなとする人の事也。こゝもとみなさうしの詞也。」とある）

㉖うちには、人々ちかくなどのたまひおきつれど、さしもて離れ給はざらなむと思ふべかめれば、いとしもまもりきこえず、さししぞきつつ、みなより臥して、佛の御とし火もかかぐる人もなし。 総角 390（大君の侍女たち）

これら傍の人物の挙動を「べかめり」が述べ立てている場合、主や客と異なりその心中には深く立ち入らず、動作・言動についての表面的な描写が多い。無論㉒㉓㉖のように心理描写の例も散見されるが、前に挙げた主や客のそれと比べると描写も単純で、その精粗には格段の差が認められる。また傍における「べかめり」は、主や客の挙動との対比において用いられている場合が多い。例えば㉔では、主たる源氏の「からめいたる船つくらせ給」ふ、また「舟の楽せらる」動作に対して傍たる「わかき人々」の心のうちが「べかめる」で述べ立てられ、遠近法が構成されている。㉕もその後につづく当該場面の「主」である薫の挙動、その身に備わるかくれなき薫りとの叙述上の対照がなされている。これらをもとに今一步推し進めて言えば、傍の「べかめり」はそれが述べ立てる人物とその挙動を、ワキの事態として距離をとりつつ場面の隅に押しやる機能があるものと考えられる¹⁰。

ここで今一度、これまでみてきた主・客・傍の三区分につき、それぞれの概念規定を確認すると以下ようになる。

- ・主 ある場面において、語り手の意識/叙述の中心となる人物
- ・客 主の行為・観察・思念の対象となる人物、あるいは或る場面や叙述の流れにおいて、主に対して副次的な位置にいる人物
- ・傍 従者や侍女など、主の行為・観察・思念の対象とならず、場合によってはその視界にすら入らずして、場面周縁の叙述対象となる人物

この三分は地の「べかめり」において、詞の「わがこと^②ひとごと」区分に相当する、述べ立ての視点を規定する重要な概念であると考えられる¹¹。そうして「べかめり」による地の叙述では、主についての描写はその心理に立ち入った語り手からの推測が多くを占め、客では主の視点を通しての語り手の推測が（例⑳～㉑）、また従についてはあまり心理に立ち入らず、その装束や挙動などについての外面描写が多い。

さらに、以上の考察から明らかになった三分それぞれのケースにおける使用傾向の違い、とりわけなぜそこで「べかめり」が用いられているのかという使用の意図について、これまでの考察で明らかになったことをまとめると以下ようになる。

- ・主・・・語り手の視点から主の挙動・心理を描写するために。とりわけ語り手の視点から、表からみえる挙動に対してその裏に秘められた心理をうがったために。
- ・客・・・語り手とともに主の視点から客の挙動・心理を描写するために。あるいは語り手の視点から主の挙動と対置させるために。
- ・傍・・・その存在や事態を場面の脇に押しやる（「めり」のはたらきによる）ところが大きいであろう）ために。あるいは主客に対する周縁的存在・事態であることを明示するために。

あるいは客についてはより機能的な使用理由として、①語り手が主の視点に立つため ②主と語り手との遠近を示すため ③主との対比の上でそれが客たることを示すため、「べかめり」使用が効果的な手段として用いられているとみることもできる。

ところで前々節では、地の「べかめり」に 1) 覚知可能な言動、2) 直接覚知しがたい人物の心理を述べ立てる例の二類型があることを指摘した。ここで主客傍それぞれにつき、1) と 2) の比率を示すと

主＝9：15　客＝9：17　傍＝11：7

となる。このように主と客では心理描写の割合が高いのに比し、傍では覚知可能な動作の描写が多いことがみてとれる。この点も主客傍の三分の枠組みを分析の手がかりとして用いる一つの根拠となるであろう。

以上、地の「べかめり」では詞のそれにおける「わがこと^②ひとごと」の視座に相当するものとして主客傍の別を想定したが、この三分はすなわち、物語叙述における語り手の視界構造、人物や事態の把握様式を反映するものであることが確認された。また考察の過程で、そのような構造ないし様式を成り立たせるものとして、他の助動詞との対応（㉒㉓にみられる「たり」「けり」との照応など）が重要な要素であることも指摘できた。そこで次節では、他の助動詞とのテキスト構成上の照応関係をみることを通して、「べかめり」の用法上の特徴と、その使用の必然性について考えてゆく。

五、一文中における「べかめり」と他の助動詞との対照叙法—「べし」との互用例を中心に

本節ではこれまでとは分析の視点を変えて、前稿で詞の用例において試みたのと同様に、文中における他の助動詞との機能上の互用および照応関係を検討することを通して、本助動詞の特質とそのテキスト構成機能の解明を試みる。それにあたっては、

- 1) 「べかめり」構成語基である「べし」および「めり」との互用

2) それ以外の助動詞との照応

以上二つに分類した上で見てゆく¹²。順番は前後するが後者の例から挙げる。まずは「たり」との照応である。

③⑦げにいと心ことによしありて、おなじ木草をもうゑなし給へり。月もなきころなれば、やり水にかゞり火ともし、灯籠などもまゐりたり。南面いときよげにしつらひ給へり。そらだきものいと心にくくかをり出で、名香の香などにほひみちたるに、君の御おひかぜいとことなれば、うちの人々も心づかひすべかめり。 若紫 161
ここで破線で示した「たり」「り」は、語り手囁目の情景を述べ立てるものとして機能しているのに対し、「べかめり」は人々の心中の述べ立てにあずかっている。

③⑧みこたち、上達部よりはじめて、その道のは、みな探韻給はりてふみつくり給ふ。宰相中将、春といふもじ給はれり、とのたまふこゑさへ、れいの、人にことなり。つぎに頭中将人のめうつしもただならずおぼゆべかめれど、いとめやすくもてしづめてこわづかひなどものものしくすぐれたり。 花宴 274
これは頭中将に関する描写であるが、「たり」がその外面の様相の描写に預かるのに対し、「べかめり」は内面の心理描写に関わるものであることが分かる。このような外面～内面の対照叙法は、次に挙げるような動詞基本形との照応においてもみられる。

③⑨したにはおもひくたくべかめれど、ほこりかにもてなしてつれなきさまにしありく。 須磨 33
ここで参考までに、詞における「べかめり～たり」の照応例を挙げる。

「いとけうとげになりにけるところかな。別納の方にぞ曹司などして人住むべかめれど、こなたははなれたり。 夕顔 120
文中「こなた」が端的に示すように、話し手が身を置いている現場、目の前事態の描写には「たり」が、それに対し「べかめれ」は現場からは離れた「別納の方」についての説明で、ここでは両助動詞の照応を生かして「遠～近」の対照がなされている。以下に挙げるのは「けり」との照応の例である。

③④（再掲）山のこだち中島のわたり色まさる苔のけしきなどわかき人々のはつかに心もとなくおもふべかめるに、からめいたる船つくらせ給ひける、いそぎ装束かせ給ひて、おろしはじめさせ給ふ日は、雅楽寮の人めして、舟の樂せらる。 胡蝶 400

③⑤（再掲）心にくくもてかしづき給ふ姫君たちを、さるは、心ざしことに、いかでと思ひきこえ給ふべかめれど、宮ぞ、いかなるにかあらむ、御心もとめ給はざりける。 竹河 29

再掲の③④、③⑤の双方には構文上の類似がみられる。両例とも条件節では傍あるいは客となる人物の心中が「べかめり」によって述べ立てられ、対する主節では主たる人物（③④は源氏、③⑤は匂宮）の挙動あるいは心内が「けり」で叙述されている。いわばサブとメインの関係構成、かつ遠近が示される形で対照叙法が構成され、条件節の「べかめり」述べ立て事態は遠かつワキである。とりわけ③⑤では、主たる匂宮が「ぞ」のとりたてによってクローズアップされていることも、これを如実に示すものとなっている。

③⑩をとこ君は、いにしへをくゆる心のしのびがたさなども、いとしづめがたかりぬべかめれど、昔だにありがたかりし御心の用意なれば、なほいと思ひのままにももてなしきこえ給はざりけり。 宿木 68

男君すなわち薫の挙動を述べるくだりであるが、その心内が「べかめり」で、他方の「けり」はその具体的動作を述べ立てている。このように同一人物のありさまについて

心内と動作両面からの叙述がなされ、その際「べかめり」は語り手からは窺い知りがたい、いわば語り手からは外面の容貌動作に比して「遠い」存在の心を叙述するものとして機能している。ここでも遠近の距離感を構成するものとして両者の対照がなされている。

④いほどもなくちかければ、とにたてわたしたる屏風のなかをすこしひきあけてあふぎをならし給へば、おぼえなき心ちすべかめれど、ききしらぬやうにやとてゐざりいづる人あなり。 若紫 164

ここでの「あなり」の「なり」は聴覚推定（いわゆる「伝聞推定」）に対して、という意味での）と思われるが、このような具体的知覚に基づく「なり」の述べ立て内容に対して「べかめり」は侍女の心内を叙述している。

これらはいずれも、「べかめれど」のような条件節に現れているが、条件節末尾の用言は常に文末辞との対応関係をはらむものである。そこから上の諸例が示すように、文末辞と「べかめり」との意味的照応が必然的に構成される。次に挙げるのは準体節中に「べかめり」が現れ、主節との照応が見られる例である。

⑩（再掲）今はさりとて心やすきをとおぼして、宮はねんごろにきこえ給ひけり。はかなき御かへりも、きこえにくくつつましきかたに、女がたはおぼいたり。世にいたうすき給へる御名のひろごりて、このましくえんにおぼさるべかめるも、かういとうづもれたる葎のしたよりさしいでたらむ手つきも、いかにうひうひしく、ふるめきたらむ、など思ひくし給へり。 椎本 364

これは前節⑩の例であるが、そこでも述べたように本例では「たり」叙述による大君中君の女方と、「けり」叙述による匂宮との遠近対照叙法がその基底にある。そこへ用いられた「べかめり」は、匂宮の挙動、すなわち女君にとってはそなた事態を述べ立てるものとなっている。さらにこなた事態の「かう」との対比も、このような対照叙法の現れとみることができる。

以上の対照例より、「べかめり」は条件節中であって人物の心内、語り手からは場面的、知覚的に遠い事態、あるいはワキの事態の述べ立てにあずかることが見て取れる。

次に「べかめり」構成語基である「べし」および「めり」との互用についてみていく。まず、「べし」と「べかめり（べかなり）」の互用例である。

⑫やんごとなくせちにかくし給ふべきなどは、かやうにおほぞうなるみづしなどにおきちらし給ふべくもあらず、ふかくとりおき給ふべかめれば、二のまちの心やすきなるべし。 簗木 36

これは雨夜の品定めが始まるきっかけとなる場面で頭中將が、源氏の手元にある女性からの消息文を詮索するくだりであるが、「やんごとなくせちにかくし給ふべき（ふみ）」という同一物に対する異なる処置の可能性がそれぞれ「べくもあらず」と「べかめり」の双方で述べ立てられ、興味深い例である（ちなみに林逸抄はこの個所に「草子の地とも云ふべきにや」と注する）。ここで「べくもあらず」が用いられているのは、他見が憚られる消息文を安易に「置き散らし給ふ」という可能性は、理の当然の帰結として高い確度で否定できるため「べし」で断言している。これに対して「ふかくとりおき給ふ」行為は他の可能性も否定できない（あるいはそこまで奥深い所へは隠していないかもしれない）ため、あえて「めり」が熟合した「べかめり」を用いて述べ立てている。つまり事態の確度に関して両者の述べ分けがなされている。また、そもそも前者は否定表現であるため、べかめりは用いにくいという事情もあるだろう。

④いとしのびてかよはし給ふことはなほおなじさまなるべし。もののきこえもあらばいかならむとおぼしながらいの御くせなれば今しも御心ざしまさるべかめり。

賢木 355 入楚) 草子地なるべし

源氏についての描写であるが、外面的様相、すなわち具体的な行動には「べし」が、対して心理描写には「べかめり」が用いられている。

④をとこはさしもおぼさぬことをだになさけのためにはよくいひつづけたまふべかめれば、ましておしなべてのつらには思ひきこえ給はざりし御なかのかくてそむき給ひなんとするをくちをしうもいとほしうもおぼしなやむべし。 賢木 338

こちらは「外面的様相＝べかめり ～ 内面心理＝べし」となっており、④の例に見られるような傾向とは一見矛盾するようであるが、「べかめり」は「をとこ」すなわち源氏の普段ありがちなさまを想い設けて叙述しているのに対し、「おぼしなやむべし」では今、語り手が目の当たりにしている現場の、ある特定の事態が叙述されている（ちなみに、破線で示した「A だに～まして B は…」の構文も、この「不特定事態 A～特定事態 B」の対照を際立たせるものとして機能しているかのごとくである）。これはあるいは、語り手からは遠い不特定事態と、今ここにある近い特定事態、という関係として図式化できるかもしれない。

⑤西の対のひめ君、こともなき御ありさまおとどのきみもわざとおぼしあがめきこえ給ふ。御けしきなどみな世にきこえいでておぼししもしるく心なびかし給ふ人おほかるべし 1)。わが身さばかりとおもひあがり給ふきは人こそたよりにつけつつけしきばみこといできこえ給ふもありけれ、えしもうちいでぬ中の思ひにもえぬべきわかきむだちなどもあるべし 2)、そのうちにことの心をしらでうちのおほいどのの中將などはすきぬべかめり。 胡蝶 403

⑤は「西の対のひめ君」、すなわち玉鬘をめぐる求婚譚の序章をなすくだりである。ここでの「べし 1)」は、「御けしきなどみな世にきこえいでておぼしし」、すなわちおとど(＝源氏)が玉鬘の類まれなさまを世に喧伝したことから「心なびかし給ふ人」多し、という理の当然としての推定結果を述べ立てている。他方の「べし 2)」は先行する助動詞「けれ」と対照叙法を形成、「けしきばみこといできこえ給ふ」と「中の思ひにもえぬ」という、いわゆる女性に対して積極的なタイプと奥手な性格との二タイプの男性の存在が対置されているのであるが、この「べし」もやはり、世間一般の男性タイプのありようから推しての、理の当然としての述べ立てである。そこから叙述は「そのうちに」でその中の特定の人物に焦点を絞るのであるが、その人物の「すきぬ」という心中が「べかめり」で述べ立てられている。ここでは先行する「べし 1) 2)」と異なって述べ立て事態は心中、換言すれば外面の様相から推し量れるものでもなく、また理の当然として推定し得る事態ともいえないため、あえて「べかめり」が用いられ、「べし」との述べ分けがなされているとみることができる。

以下の二例は「べかめり」による叙述が準体節を形成して文の流れがいったんそこで止まり、それを承ける節が「べし」によって言い留められる、という構造を取るものである。

⑥このわか君のうつくしきにつけても、いままでみこたちのおはせぬなげきをみてまつるに、いかにめいばくあらましとあまりのことをぞ思ひてのたまふ、おほやけごとはあるべきさまにしりなどしつつまゐり給ふことぞやがてかくてやみぬべかめる、さてもありぬべきことなり。 真木柱 145

④⑦たまさかにかくものし給へるにつけても、めづらしくあはれにおぼゆべかめる、
とはずがたりもしいでつべし。 手習 343

これら二例では「べかめり」は事態の描写、対する「べし」は事態についての語り手の評言を述べる個所に用いられている（④⑥については古註の細流抄や入楚に「草子地也」との指摘がある）。次にやや構造の複雑な例を挙げる。

④⑧あはれ、このころぞかし、野の宮のあはれなりしこと、とおぼしいでて、あやしう、やうの物と、神うらめしうおぼさるゝ御くせのみぐるしきぞかし。わりなうおぼさば、さもありぬべかりしとしごろは、のどかにすぐい給ひて、いまはくやしうおぼさるべかめるも、あやしき御心なりや。院もかくなべてならぬ御こばへをみしりきこえ給へれば、たまさかなる御かへりなどはえしももてはなれきこえ給ふまじかめり、すこしあいなき事なりかし。 賢木 369

これは齋宮に卜定され、伊勢下向前に野宮に籠る朝顔齋院とのことを、悔恨の情を交えながら回想する源氏の心中と、当の朝顔齋院（文中には「院」とある）の心中が並記対照される形で叙述される場面である。ここでの「べかりし」は「わりなうおぼさば」の仮定を承けて過去事態に対する設想、すなわち反実仮想となっている。これに対して「べかめる」は今の源氏の心中事態を推定的に描写するものとなっている。ここで細流抄がこの箇所に「草子地也」と注するように、「あやしき御心なりや」は語り手の評言であり、その評の対象となる事態に「べかめり」が現れていること、前掲④⑥と同様である。また、「院も」以下で叙される朝顔齋院の心中は「べかめり」の否定表現に相当する「まじかめる」により述べ立てられているが、それに続くのはやはり語り手の評言で、「べかめる～まじかめる」対置による源氏と齋院それぞれの心中が効果的に対照されている。他方、「べかめり（/まじかめり）」と「べし（べかりし）」は人物の心中とそれ以外の事態、具体的には語り手による設想内容という点で述べ立て対象における棲み分けがなされているとみることができる。

さて、「べかめり」と「べし」の相関を示すものとして、互用以外に次のような例もある。

④⑨後の御心いちはやくて、かたがたおぼしつめたる事どものむくいせんとおぼすべかめり。（賢木 346）＜中略＞かくひと所におはしてひまもなきに、つゝむところなく、さて入りものせらるらむは、ことさらに軽め弄ぜらるゝにこそは、とおぼしなすにいとどいみじうめざましく、このついでにさるべき事どもかまへていでむによきたよりなりとおぼしめぐらすべし。 賢木（巻末）391

これは源氏と朧月夜尚侍との密会に気づいた弘徽殿女御が、源氏への報復を画策するに至る場面である。弘徽殿女御の心中に関するほぼ同様の内容が、新体系本によれば約 50 頁を隔てて前後照応しているとみられる例であるが、その述べ立てが「べかめり」から「べし」へと移行している点は注目し値する。これは語り手の目から見て、事態の展開が漠然とした予測（「べかめり」）から実現への確信（「べし」）へと近づくことの反映とみることができる。

次に地における「めり」と「べかめり」との互用例をみるに、確認できるのはわずかに以下の 2 例（地の「べかめり」は全 70 例）のみであり、詞において全 83 例中 7 例確認されたのに比しても僅少である。

⑤御なほしなど着給ひて、南の高欄にしばしうちながめ給ふ。西面の格子そそき上げて、人々のぞくべかめり。すのこの中のほどに立てたる小障子の上よりほのかに見え給へる御ありさまを、身にしむばかり思へるすき心どもあめり。 簾木 70

⑥さるべき節会どもにも、この御時より、と末の人の言ひ伝ふべき例をそへむとおぼし、私ざまのかかるはかなき御あそびもめづらしき筋にせさせ給ひて、いみじき盛りの御世なり。おとどぞなほつねなきものに世をおぼして、いますこしおとなびおはしますとみたてまつりて、なほ世をそむきなんとふかくおもほすべかめる。むかしのためしをみきくにも、＜中略＞静かにこもりゐて、後の世のことをつとめ、かつは齢をものべん、とおもほして、山里ののどかなるをしめて、御堂をつくらせ給ひ、仏經のいとなみそへてせさせ給ふめるに、末の君たち、思ふさまにかしづきいだしてみむとおぼしめすにぞ、とく捨て給はむことはかたげなる。 絵合 185

いずれの例も「べかめり」述べ立て事態は理の当然として帰結し得る事柄である。すなわち⑤は傍の例であるが、「南の高欄に源氏が姿を現したので人々がのぞくのももっともだ」、また⑥は源氏の出家への志向が語られる場面であるが、「つねなきものに世をおぼ」すことから「世をそむきなん」すなわち出家への志向が起こるのは当然だ、といった論理がそれぞれの表現を支える根底にある。これに対し「めり」が述べ立てるのは人物の挙動や心理に関する様相の推定であり、理の当然から導き出されたものではない。ここでの「べかめり」は語基「べし」の当為の意が前面に押し出されることで「めり」との言い分けがなされているものとみられる。ここには前稿の詞における互用例の解析の際に触れたような、ある種の対異散同の論理がみられるのである。

以上をまとめると、他の助動詞との照応あるいは互用において双方の助動詞の間に

- 1) 確度の違い、すなわち述べ立て事態に対する語り手の確信度、あるいは理の当然から帰結される事態かどうか
- 2) 遠近の違い、すなわち物理的・心理的にみた、語り手と述べ立て対象事態との距離
- 3) 内外の違い、すなわち外面的様相か内面心理の叙述か

以上3つの指標が析出、確認された。「たり」「けり」や「べし」との照応・互用例では「べかめり」は遠、確度弱の事態、内面心理の叙述にあずかり、他方「めり」との互用では理の当然に基づく確度高の述べ立てが前面に押し出される傾向がみられる。同じ「べかめり」が「べし」との互用では確度弱、「めり」との互用では確度高事態の述べ立てとして機能しているのである。また例は僅少なながら、描写に「べかめり」、評言には「べし」という述べ分けがなされている例も確認された。このような両助動詞の述べ分けは、対置される助動詞によって「べかめり」が表出する語義も微妙に変化することを暗に示しているが、そこを見ることで却って「べかめり」の語義の本質的な部分も明らかになるのではないかとと思われる¹³。

むすびにかえて

以上、地の「べかめり」について、今回は主客傍の概念を導入を試み、さらに他の助動詞との照応・互用関係に着目することで、その意味用法上の特徴とテキスト構成機能のありようについてみてきた。

本作品における「べかめり」は、詞と地を問わず基本的には表現主体からみた事態に対する確度の認定と、叙述対象との物理的・心理的遠近に関わるものであり、具体的には述べ立て対象を相対的に遠い事態として、また事態に対する確信度が比較的高いながらもあえて確言を避ける場合に用いられる。その遠近、確不確を定める基準として、表現主体と表現対象、あるいは表現対象相互の距離を主体自身がどう捉えているかが重要であり、地の文ではそれを測る一つの指標として、場面における語り手と人物との距離、あるいは場面においてどの人物をメインとするかという、今回提示した主客傍の枠組みが一つの指標となるものと思われる。

また、本作品の地においては「べかめり」がとりわけ人物の心内描写に多く用いられているが、その際上述の、遠い事態として述べ、あえて確言をさけるという「べかめり」の機能、すなわち小西（1971）のいう叙述対象との「離れ」を作り出す作用は、本作品の心内描写に格好のものであったと考えられる。

今回は源氏物語に焦点を絞って考察したが、今後は他の作品にも対象を広げて「べかめり」の語性についての検討をさらに進めていきたい。

（完）

付記）

前稿と同様、本稿での源氏物語の引用本文は岩波の新大系本に拠った。また引用の例文において、巻名に続く洋数字はその頁数を示す。

参考文献

- 榎本正純（1982）『源氏物語の草子地』笠間書院（笠間叢書 166）
小西甚一（1971）「源氏物語の心理描写」『源氏物語講座』（有精堂）第7巻
坂田一浩（2023）「古典日本語における助動詞によるテキスト構成をめぐって—古典教育への応用を視野に—」『北陸大学紀要』55号
清水好子（1953）「源氏物語の作風」『国語国文』221号（のち『源氏物語の文体と方法』に所収）
杉山康彦（1973）「源氏物語の語りの主体—その虚構の構造について—」『文学』
中野幸一（1971）「源氏物語における草子地」『源氏物語講座』（有精堂）第7巻
三宅清（2022）「複合辞ベカメリについて—証拠性の変質」『國學院雑誌』123
渡辺実（1991）『わがこと・ひとごと』の観点と文法論『国語学』165 pp.1-14

注

¹ 語り手が人物の視点に憑依していることに関してはすでに、後にも触れる萩原広道『源氏物語評釈』に次のような指摘がある。「物語の中なる人の心詞ならで、他より評じたるごとき所を草子地といへり。これは物語かたる人の語にとりなしたる作者の語也。その中に、草子地ながらしばらく其物語の中の人的心里になりていふ所あり。また物語の中なる人の詞ながら、実は草子地よりいふ所あり。思ひわかつべし」また、空蟬巻「かどなきにはあらじ」の註に曰く「源氏君の心になりて草子地より評したるなり、文勢あぢはひあり」と。

² 数値は榎本（1982）「本文・諸注編」に掲出の調査結果に拠った。

³ あえて挙げるとすれば、次の1例であろうか。

すぎにし年、五節などとまれりしが、さうざうしかりしつもりとりそへ、上人の心ちも常よりもはなやかに思ふべかめる年なれば、所々いどみて、いといみじくよろづをつくし給ふきこえあり。 少女 309

⁴ このような源氏物語における語り手の位置に関して杉山（1973）は「ただ視るだけの人格で、そこには一かけらの自我も許されない」と断言する。

⁵ この個所、新体系本では掲出の通り「べかめり」の直後で句を切っているが、ここで本来の写本の形態同様句点を取り去ると、「なまめきておはすべかめる（ヲ）みたてまつらぬそくちをしけれと」と、客語「ヲ」の格で続く構文であることが知られる。またここでの「べかめり」は、物越しゆえ源氏（およびその視点を共有する語り手）が女御のさまを直接目睹できないという「隔て」を表明しているものとみられる。

⁶ 広道の主客概念は戦後の研究においても杉山（1973）が若紫冒頭の解析で暗に援用している。また清水（1953）は源氏物語に関して、「二人の相対座する中心人物のいる場面、これが、この物語の心象風景を刻み上げてゆく際の原型である。」と述べており、広道が「人と人と相対ひて事ある」場面を特に問題とした理由の説明ともなり得る。

⁷ 平安朝の物語作品では助動詞「たり」「けり」が近接して現れている場合、語り手が目の当たりにしている場面を前者が、そこから時間的・空間的に離れている事態を後者が述べ立て、それにより場面上の遠近法が構成されることが多い。これについての詳細は坂田（2023）を参照

⁸ ちなみに杉山（1973）は、若紫巻における光源氏と葵上の両者に関する叙述につき、「葵上はつねに外側から、光源氏を通して表現されるだけである」と述べる。

⁹ そもそも3)は、1)および2)とは相互に排他的な概念ではないため、本節冒頭2)の例のように1)かつ3)に該当する例もある一方で、1)～3)相互の条件の間で齟齬をきたすことがあり得る。例えば1)の基準によれば客となる人物が、当該場面での主たる人物を思念する場合で、3)の基準に照らせば主客が逆転してしまう。

「（前略）いまはかのくらきみちのとぶらひにだにたのみ申すべきを、かしらおろすべきよしものし給へ。さるべき僧、たれかとまりたる」などのたまふ御けしき、心つよくおぼしなすべかめれど、御かほの色もあらぬさまにいみじくたへかね御なみだのとまらぬをことわりになしくみたてまつり給ふ。 御法 172

これは紫上の死に直面して「心つよくおぼしなす」源氏のさまが、「ことわりになしくみたてまつり」たる夕霧の視点から描写されている場面であるが、この場面での本来の主は源氏であるが、夕霧の観察・思念の対象であり、その限りでは客である。このような場合は叙述にあたっての「対象化」という作用を重視した上で3)の基準を優先し、

源氏を客と認定したい。そもそも同じ場面でも叙述の視点の転換によって主客が入れ替わることは本作品によく見られることである。

¹⁰ なお、傍のカテゴリに含まれる侍女はまた、本作品の語り手が属する階層とも重なる。その点でも本作品の解析において、この「傍」を特立させることは重要であろう。それはまた、語り手の分身が当該場面に自己投影の形で顔をのぞかせる、といった体としても捉え得る。次に示す例（「人々のぞく」に注目）などはその典型であろうか。あえて傍の区分を立てた所以である。

御なほしなど着給ひて、南の高欄にしばしうちながめ給ふ。西面の格子そそき上げて、人々のぞく べかめり。すのこの中のほどに立てたる小障子の上よりほのかに見え給へる御ありさまを、身にしむばかり思へるすき心どもあめり。 簾木 70

¹¹ この、主・客・傍の三分は、古来からの日本の応対・もてなしの場面において基底となる概念であろう。例えば能のシテ・ワキ・ツレの別がそうであり、また小笠原流礼法では儀式において、主・客・通い（いわゆる給仕役）ということがいわれる。ほかに、茶道においては亭主・客・半東がそれに相当し、さらに連歌俳諧の座においても、宗匠・連衆・執筆の別があるのはよく知られるところである。

¹² 「べかめり」はその構成語基である「べし」「めり」と、その成り立ちの上でも意味用法を或る部分で共有しているため、両者の対応関係には「互用」を、その他の助動詞には「照応」を用いてあえて両ケースを区別した。

¹³ なお、「べかめり」と「べし」の機能上の相違を明らかにするには、さらに

わざと人すゑてかしづきたまふ、とききたまひしよりは、やむごとなくおぼしきだめたることにこそはと、心のみおかれて、いとうとくはづかしくおぼさる べし。

紅葉賀 245 万水一露「草子の批判の詞なるべし」

のような草子地に用いられた「べし」と同じく草子地の「べかめり」を子細に比較検討する必要があるが、今回は紙幅の都合上果たし得なかった。ただ今回の考察をもとにおよその見通しを述べると次のようになる。すなわち草子地において「べし」ではなくあえて「べかめり」を用いるのは、語り手が目睹（場面の描写に多い）、あるいは理の当然より推定可能な確信ある事態を叙述する場合も（すなわち本来「べし」で述べ立てるところを）、語り手と場面、あるいは登場人物との心理上の「離れ」を産み出すために「めり」を熟合させた「べかめり」をあえて用いたものと考えられる。